

宮本昌孝

Miyamoto Masataka

家康、死す

下





講談社文庫

家康、死す(下)

宮本昌孝

講談社

【著者】宮本昌孝 1955年、静岡県浜松市生まれ。日本大学芸術学部卒業後、手塚プロを経て執筆活動に入る。'94年、『剣豪将軍義輝』で一躍脚光を浴び、時代・歴史小説の旗手となる。主な著作に『おねだり女房 影十手活殺帖』『夕立太平記』『藩校早春賦』『夏雲あがれ』『ふたり道三』『風魔』『海王』『天空の陣風』『将軍の星 義輝異聞』『陣星、翔ける』などがある。

いえやす し
家康、死す(下)

みやもとまさたか
宮本昌孝

© Masataka Miyamoto 2014

2014年1月15日第1刷発行

発行者——鈴木 哲

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-5817

業務部 (03) 5395-3615

Printed in Japan



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義

本文データ制作——講談社デジタル製作部

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社国宝社

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えます。なお、この本の内容についてのお問い合わせは講談社文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277719-3

家康、死す（下）●目次

第十五章

上田城の戦い 家康の死

第十四章

上田城の戦い 家康の死

第十三章

上田城の戦い 家康の死

第十二章

上田城の戦い 家康の死

第十一章

上田城の戦い 家康の死

第十一章 虎の罎あしおと

9

第十二章 三方ヶ原合戦

94

第十三章 新しき世子

146

第十四章 乱麻

182

第十五章 すり替え

262

終章 死者の銃弾

307

解説 島内景二

312

上卷

序章

謀略の銃弾

第一章

岡崎暗夜

第二章

双竜

第三章

六歳の影武者

第四章

ささら

第五章

家康と瀬名

第六章

遠江攻め

第七章

信長と家康

第八章

大敵、迫る

第九章

海狗腎

第十章

源応尼



講談社文庫

家康、死す(下)

宮本昌孝

講談社

家康、死す（下）●目次

第一章

家康の死

第二章

第三章

家康の死

第四章

第五章

家康の死

第六章

家康の死

第七章

第八章

家康の死

第九章

第十章

家康の死

第十一章

第十二章

家康の死

第十一章 虎の登あしおと

9

第十二章 三方ヶ原合戦

94

第十三章 新しき世子

146

第十四章 乱麻

182

第十五章 すり替え

262

終章 死者の銃弾

307

解説 島内景二

312

上卷

序章

謀略の銃弾

第一章

岡崎暗夜

第二章

双竜

第三章

六歳の影武者

第四章

ささら

第五章

家康と瀬名

第六章

遠江攻め

第七章

信長と家康

第八章

大敵、迫る

第九章

海狗腎

第十章

源忘尼

家康、死す（下）

第十一章 虎の登 あしおと

一

織田信長と武田信玄は、信長の上洛以前から姻戚関係を結んで、友好策をとってきた。だが、どちらも上つ面だけの笑顔であつたことは、言うまでもない。

この元龜三年（一五七二）の正月、信玄から信長の右筆の武井夕庵へ書状が届いた。

「たとえ扶桑国の過半を手に入れたとしても、信長どのと疎遠になることは決してない」

一見、変わらぬ友好を表しているようだが、読み解けば、恫喝であることが分かる。

いまや京に旗を立て、天下統一に突き進む織田信長に対し、信玄は扶桑国、すなわ

ち日本の過半を自分が手に入れると言ひ、さらに、わが軍門に降^{くだ}るのなら、これから
も悪いようにはしないと手を差し伸べていると解釈できる。

右の文言のあとに、

「邪^{よこしま}な者の讒言^{ざんげん}など信じないように」

とつづけられているが、これはもはや、おためごかしというものである。
挑戦的、というていどの内容ではない。完全に信長を見下^{みくだ}し、おまえを討つなどた
やすいことだと匂^{にお}わせているのである。満腔^{まんこう}の自信といつてよい。

ついに、猛虎^{もうこ}が風雲児^{ふううんこ}へ牙^{きば}を剥^むいたのであつた。

信玄の自信の裏付けは、將軍足利義昭を中心^{あしかがよしあき}に形成された反信長連合というべき
人々の、大いなる期待を一身に受けていることによる。

石山本願寺^{いしやまほんがんじ}、比叡山延暦寺^{ひえいざんえんりやくじ}、越前^{えちぜん}の朝倉義景^{あさくらよしかげ}、北近江^{おおうみ}の浅井長政^{あざいながまさ}、一度は畿内^{きない}に覇^は
を唱^なえかけた三好^み三人衆^{さんしゆ}などに加え、大和^{やまと}の松永久秀^{まつながひさひで}と北河内^{かわち}の三好義継^{よしつぐ}が信長を見
限り、逼塞^{ひつそく}中であつた南近江^{なんきんけい}の六角氏^{ろっかく}も復活し、かれらは皆、武田信玄上洛という一
致した目標達成のため、戦いに突入しはじめていた。

わけでも、信玄と本願寺法主^{ほんぐんす}の顕如^{けんにょ}は、それぞれの夫人が姉妹という義兄弟の關係
にあり、また信玄が熱心な仏教信者でもあつたことから、かねてよりつながりは浅く
なかつた。

信玄自身の上洛への準備も怠りない。昨年おこなの相模北条氏との同盟締結もそのひとつである。ほかに、自分のむすめと、願証寺がんしやうじの御曹司おんぞうしとの婚約を成立させるなどした。尾張・美濃・伊勢おわり・みの・いせの本願寺門徒を統轄して、織田信長と激闘をつづける伊勢長島一向一揆いっせきの本拠が願証寺である。

信玄は、武田の領国内においては、この一、二年で家臣や寺社に土地宛行や諸役免除を常より増やしている。すべては、きたるべき大軍事行動に向けた施策しさくであった。徳川とくがわでは、信玄のそういう着々とした準備行動の情報を得ており、こちらも臨戦態勢を整えている。

日中はまだ暑いものの、つくつく法師ほうしが鳴いて秋風が立ちそめた頃、浜松はままつの世良田次郎三郎じろうさぶろうのもとへ、岡崎おかざきの惣持尼寺そうじにじから使いの者がやつてきた。

「御方おかたさまが、久方ぶりに世良田せらたどのと駿府時代すんぶの昔語りなどしたいとご所望ゆえ、お越しいただけまいか」

というのである。

めずらしいことであつた。徳川の家臣の中で瀬名せなが心を許している者は、石川いしかわ与七郎よしちろうただひとりであり、余よの者が招よばれることは滅多にない。もつとも、余の者のほとんどは、招ばれても何かと理由をつけて拝辞するのが常だが。

ただ、与七郎も、西三河みかわの統治を任されてからは多忙をきわめ、岡崎城代じやうだいであるに